

## COIL 型プログラムから学ぶ多文化理解

### 1) COIL 型授業について

ビデオ通話を使ったアメリカの学生とのディスカッションはとても刺激的な経験で、多文化理解について多くのことを考えさせられました。特に、多文化理解を実現するためには、議論を通じてお互いの価値観の違いを認識するだけでなく、その違いの背景には何があるのかを考えることが必要だと実感しました。例えばそのひとつにアメリカと日本の歴史教育の違いがありました。私のクラスでは映画『はだしのゲン』を鑑賞し、その内容をもとに太平洋戦争の意義や原爆の是非について話し合ったのですが、アメリカの生徒たちは、映画が原爆の被害を受けた住民の「下から」の視点で描かれていたことに衝撃を受けていました。というのも彼らは今まで、原爆投下を単なる事実として、空から原爆を投下した政府の「上から」の視点でしか学んでいなかったそうです。ディスカッションを通じて、ある歴史的事実に関してお互い異なる観点から学んでいたために、知識や解釈に大きな違いがうまれたと発見しました。

### 2) 学生ワークショップについて

学生ワークショップでは、新元号「令和」に関する様々な問題を議論しました。「令和」という言葉自体の解釈に触れる人もいれば、天皇制の是非に話を発展させる人もおり、大変興味深かったです。日本社会が新元号や天皇の存在をどう受け止めているかなど、日本で生活しているとあまり議論することのないテーマについて自分の経験や意見を述べるというのは難しかったけれど、とても良い刺激になりました。今後は、ワークショップの会場となるアメリカの大学からもより多くの学生の参加を募って欲しいです。日本に興味がある学生はもちろん、日本について全く知らない学生も加われば、新たな疑問や視点を取り入れた積極的な文化交流ができると思います。



### 3) TP ワークショップについて

TP ワークショップは、日本研究を軸に異なる学問分野の研究者たちを集めた場で、今までに聞いたこともないような多様な見識に触れることができ、とても充実した時間となりました。日本語でも理解が難

しい研究者同士の議論を英語で聞く、というのは大変難しい作業でしたが、これからアメリカへの交換留学を控えている私にとっては良い刺激となりました。また英語力を磨くと同時に、日本の歴史や文化についてより知識を深める必要があると感じました。

#### 4) ロサンゼルスから学んだこと

ロサンゼルスではスペイン語が話されており、ラテンアメリカにルーツを持つ人が多く住んでいます。例えばバスの中で英語とスペイン語が併用されていたり、観光地サンタモニカでは中米出身と思われる売り子がお菓子を売っていたりと、スペイン語ラテンアメリカ地域を専攻している私にとって、とても興味深い場所でした。また、英語話者とスペイン語話者では職種や身なりが異なり、言語が階層の違いを表していることも観察できました。大学内や街中を歩いているだけでも、アメリカの民族の多様さや貧困格差といった側面が実感できました。



#### 5) まとめ

COIL型授業は通常の講義と異なり、様々なアクティビティを提供しています。外大でのセッションでは、日本人学生・留学生がディスカッションを中心に共に学習し、ビデオ通話を通じた日米の学生間の意見交流も行います。現地での学生交流では、各参加者がプレゼンテーションを行いそこで扱われたテーマを議論します。これらの活動に積極的に参加することによって、日本の文化を発信する力や、異なる文化を理解しその差異が生まれた原因を探る力を得ることができます。多文化理解に興味がある方、将来国際的な環境で働いてみたいと考えている方にとっては、このプログラムは最良の経験になると思います。来年以降のプログラムのさらなる発展と、より多くの学生の参加を期待しています。